

まだまだ

# 東北復興日記



▶▶▶ 199

二〇一二年八月に始まった連載も次回で二百回。これまでに女性六十二人、男性十六人に執筆いただきました。読者の皆さまにも心から感謝申し上げます。当初から原稿の取りまどめを担う立場として今回と次回、筆を執ります。東日本大震災の後、エネルギーや食べ物について、どこでどのように作られ、どんな



J K S K 会員・  
宮城大学事業構想学  
研究科博士後期課程  
大和田順子さん



## 地域再生へ ビジョン共有

ルートで自分のところに来て  
いるのか、各地で関心を持つ  
市民が増えました。同時にコ  
ミュニティーへの関心も高ま  
りました。震災で人と人、人  
とコミュニティ、人と自然  
とのつながりが、分断されて  
いることを痛感したからでし  
た。福島のように、つながり  
そのものが奪われた地域もあ  
ります。

その一例が福島県いわき市  
を拠点に展開する「いわきお  
てんとSUNプロジェクト」  
です。震災や原発事故で放棄  
された農地を復活させるた  
め、有機栽培で生産した綿を  
製品開発する事業を通じて、  
地域再生を後押ししていま  
す。並行して、自然エネルギ  
ーによる電源開発・供給など  
を展開する電力事業も進めて  
います。地域が主体となった  
両事業には、これまでに一万

まざまなビジョンを共有する  
人が増えました。自然エネル  
ギーや食べ物を自分たちで作  
ろう▽農山村と交流して素性  
の分かるエネルギーや農産物

両事業には、これまでに一万  
五人を超える首都圏のボラ  
ンティアや、地元の小中学生  
も参加しています。

この電力事業では、いわき  
市に設置した約五十誌のソー  
ラー発電設備が一三年五月の  
稼働以降、順調に推移。志を  
同じくする「パルシステム電  
力」(東京)に販売していま  
す。最近交流の範囲が海外  
にも発展。福島の子どもたち  
が手作りしたソーラーパネル  
は、「希望の灯り」と称して  
ネパールやフィリピン、ミク  
ロネシア<sup>※</sup>に写真<sup>※</sup>の無電化地  
帯に届いています。

※この連載は、東京のN  
PO法人JKSKと、被災  
地の女性たちが協力して復  
興に取り組む「結プロジェクト」の協力を得て、掲  
載しています。